

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：教育研究所

資格：教授

氏名：上田 孝俊

| | |
|---------------|------------------------------------|
| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
| 生徒指導論 臨床教育実践学 | 教育的人間関係の構築 |
| 学位 | 最終学歴 |
| 博士（学術）、教育学修士 | 神戸大学大学院 総合人間科学研究科 人間形成科学専攻 博士課程 修了 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|------------------------------|-----|----|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| | | |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| | | |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|------------------------------|------------------------|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1. 小学校専修免許状 | 2002年3月26日 | 免許状番号：滋賀平13小専修第13号 |
| 2. 高等学校専修免許状（公民） | 2002年3月26日 | 免許状番号：滋賀平13高専修第39号 |
| 3. 中学校専修免許状（社会） | 2002年3月26日 | 免許状番号：滋賀平13中専修第34号 |
| 2 特許等 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1. 西宮市教育学研修講師 | 2014年8月1日 | 「子ども理解と教育実践」について研修講師を務めた。 「自己肯定感を育む大人のかかわり」について講演した。 第4回「学齢期」の保護者を対象とし、「学齢期後期の子どもたちの育ちと親子関係の変化～思春期を前にした子どもとの関係のつくり方について～」の講演を行った。 滋賀県近江八幡市立八幡中学校、彦根市立西中学校・中央中学校教諭 滋賀県竜王町立竜王小学校 教諭 |
| 2. 芦屋市学校保健大会講師 | 2012年1月26日 | |
| 3. 宝塚市「子どもの心を理解する」講座講師 | 2011年11月4日・2011年11月11日 | |
| 4. 中学校教諭 | 1984年4月1日～2008年3月31日 | |
| 5. 小学校教諭 | 1978年4月1日～1984年3月31日 | |
| 4 その他 | | |
| | | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|----------------------------|---------|-------------|-------------------|--|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 1. 1日15分で一生使える中学校の歴史 超重要人物 | 共 | 2017年06月19日 | PHP研究所 | 日本歴史における鍵となる人物40名をあげ、それぞれの事績や歴史上の役割とともに、人物の生き方も呈示し、歴史上の人物と対話的学習が可能となるようねらった。監修に当たる。（186ページ） |
| 2. 1日15分で一生使える 中学3年間の日本史 | 共 | 2016年09月20日 | PHP研究所 | 日本史の主要な「出来事」を40項目あげ、それぞれの原因やその後の影響を多面的に記述した。監修に当たる。（188ページ） |
| 3. 3・11 あの日のこと、あの日からのこと | 共 | 2011年9月4日 | かもがわ出版 | 東日本大震災を体験した教師の聴き取りから、教師がとった行動の意味とそれが子どもたちに与えた教育的意義について検討を加えた。（pp.108-116、田中孝彦、中森孜郎、筒井潤子、上田孝俊ら 著者の11番目） |
| 4. 小学生の日本の歴史学習事典 | 共 | 2011年6月17日 | PHP研究所 | 小学6年生の社会科（歴史）学習について、各時代の事績、出来事の重要なものを系統づけながら学習できるようにした。監修にあたる。（79ページ） |
| 5. 川の研究 生き物や人とのかかわりを探ろう！ | 共 | 2010年9月28日 | PHP研究所 | 川と地形、川の生き物、河内人々との生活との関係について、小学生の調べ学習の参考となる内容で構成し、学習課題なども掲載した。監修にあたる。（63ページ） |
| 6. 郷土をつくった偉人事典 | 共 | 2010年3月 | PHP研究所 | 小学校社会科、総合的な学習の時間の教材として都道府県別に歴史的な偉業に取り組んだ人物を取り上 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・ 共著書別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称 | 概要 |
|---|-------------|---------------|--|--|
| 1 著書 | | | | |
| | | | | げ紹介し、小学生が郷土学習に取り組む方法を示した。監修にあたる。(103ページ) |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1. 占領軍政下における滋賀県実験学校教育課程の研究～教科主義と生活カリキュラムの分化～ | 単 | 2006年12月 | | 戦後初期の社会科カリキュラムが社会認識型、生活単元型、日常生活課程型に類型化されるが、それぞれの成立の過程において、新教科「社会科」で社会認識過程を追究した、47年学習指導要領の教科の生活化に適用させその範を戦時下からの生活単元に求めた、戦後アメリカ社会科の学校のコミュニティ化を取り入れたという段階性を、戦後教育政策と関連づけて考察した。(144ページ) |
| 2. 及川平治「動的教育論」に関する研究―「題材」における活動概念の分析を中心に | 単 | 2001年1月 | | 及川平治の動的教育論の教育思想形成における社会的背景を考察し、個に着目する活動的な学習の時代的意味と、「題材」に基づく子どもの主体的学習に着目したカリキュラムの実践的意義について健闘した。(78ページ) |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1. 教師の「教育ノート」からみた教育実践概念の検討～大阪の小学校教師・山本正次の1960年代実践とその記録の考察を通して～(査読付) | 単 | 2020年3月31日 | 日本臨床教育学会編『臨床教育学研究』第8巻、正文舎、pp. 51-71。 | 「教育実践」は、マクロなカリキュラムとミクロな子ども世界の現実への応答の統合のなかで教師によって創造される営みである。カリキュラムはすでに明文化されたものだが、ミクロな非カリキュラム的な実践部分は、教師が意識的に記録し、文章化してはじめて教育実践に内部化される。本稿では、大阪の小学校教師・山本正次が遺した教育ノートなどを取り上げ、そこに記された山本の教育実践の歴史的反省、ミクロな子どもの生活世界での主体的な学びの認識(生活と科学の統合)、教師間や子ども・保護者との対話を通じた教育参加を通して、教育実践概念を検討した。(1章とまとめを担当、田崎由子・上田孝俊) |
| 2. 東日本大震災被災地の「復興」を問う―低線量被ばく下での生活感情の変化とその多様性― | 単 | 2019年3月 | 『臨床教育学研究』第25号、pp. 45-55、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 | 2011年4月から始めた東日本大震災被災地調査の一環として、特に福島県郡山市及びその周辺の低線量被ばく地域において聴きとり調査をおこなった結果を考察したものである。帰還困難区域の解除などの施策のなかで、この間に地域住民が感じていた人体への影響、生活不安、風評被害などへの心痛は、「生の条件」の相違により「個別化」がいつそう進んでいることが明らかになった。ナラティブ的な生活感情の理解がこれからの支援として重要である。 |
| 3. 低線量被ばくのなかで生きる母親の孤立感と一時避難・一時保養の意義(査読有) | 共 | 2016年3月31日 | 日本臨床教育学会編集『臨床教育学研究』第4巻、正文舎、pp. 39-55。 | 長期的低線量被ばくは「見えない災害」であり、被災の事実の人々の「語り」に内包される。被災地の人々は、安全をアピールする支配的なストーリー、家族や周囲の人々の対立的なストーリーと交錯し、自身の支えとするストーリーを抑圧させていく苦悩に苛まれる。一時避難・保養のなかではそれらが「語られ」、受容されることが見いだされた。[はじめに・1・2・おわりに]を担当。(上田孝俊・宗像家子) |
| 4. 「感情を受けとめられる」場としての授業(査読付) | 単 | 2011年3月 | 『臨床教育学研究』第17号、pp. 1-16、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 | ハーバーマスのコミュニケーション的理性に関する3つの視点(真理生、規範性、誠実性)は、学校生活において学習者が獲得する「学力」を問い直し、再定義を迫っている。特にその基盤的な能力として、言動の背景にある感情の理解が学習保障されることの意義を論じた。 |
| 5. 東日本大震災についての教師の聴き取り調査報告 | 単 | 2011年10月10日 | 日本臨床教育学会編集、『臨床教育学研究』第0巻(群青社)、pp. 150-162。 | 学校・地域・人々が物語をもつことが危機(分かれ道)対応に際しての規準となることを、震災体験者の聴き取りから論じた。 |
| 6. 反抗の教育的意味―文部科学省「平成20年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果(暴力行為、いじめ等)について」の検討をとおして―(査読付) | 単 | 2010年3月 | 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科、『臨床教育学研究』第16号、pp. 1-13。 | 文部科学省の問題行動の調査とその分析について批判的に検討した。不登校は全国的な課題でとされるが、「暴力行為」や「いじめ」は調査結果から都道府県によって発生率が大きく異なる極めて地域的な課題としか読み取れず、都道府県別の実情に応じた個別の対策をとる必要があるということしか明らかにならない。生徒指導の深化のための調査であるなら、傾向から煽るのではなく事実が読み取れる範囲での分析にとどめるべきであると論じた。 |
| 7. 生徒の課題に即して連携を築く教師の専門性と実践(査読付) | 単 | 2010年12月15日 | 「臨床教育学論集」武庫川臨床教育学会、第4号、pp. 26-37。 | 底辺校の普通科高等学校における困難状況の分析と、軽度の知的障害をもつ生徒の進路保障に関わる教師のコーディネーションの取り方について論考した。 |
| 8. 寄り添われる学習体験が子どもを支える | 単 | 2009年10月5日 | 全国公立学校教頭会編、『学校運営』No.579、pp. 20-23。 | 授業において教育的な人間関係はいかに構築されていくのか。子どもたちの相互共同性と教師の支援について実践をもとに考究した。 |
| 9. 教育的な人間関係の構築についての一考察(査読付) | 単 | 2009年03月 | 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科『臨 | 関係発達論における「同化」の過程を、「同化」とそれに対する育てられる側の「異化」の過程との相 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|--|---------|-------------|--|---|
| 3 学術論文 | | | | |
| 10. 戦後「新教育」形成期における教科主義と生活カリキュラムの分化について～滋賀県新教育実験学校のカリキュラム分析～（査読付） | 単 | 2007年3月 | 床教育学研究』第15号、pp. 1-14。 『神戸大学発達科学部研究紀要』第14巻第2号、pp. 57-68。 | 互主体的なものとしてとらえ、支援者の変容や友人としての装いの意味を考察した。 戦後初期における滋賀県新教育実験学校のカリキュラムを分析し、滋賀県師範学校女子部附属小学校の1947年度教科主義的なカリキュラム研究と1948年度の教科の生活化に基づく教科枠を越えた生活カリキュラムの各校への特化的な広がり過程を明らかにした。 |
| 11. 戦後初期における教育課程編成の理論とその変化～滋賀県新教育実験学校稲村小学校の実践と「恒常課程」～（査読付） | 単 | 2006年10月 | 『神戸大学発達科学部研究紀要』第14巻1号、pp. 15-26。 | 西日本の占領軍政下の民主教育政策の一つとして教職員によるカリキュラムの自主編成があった。コミュニティ・カリキュラムは民主社会の機能を学校に再現し、それを担う資質を発達段階における学習目標としてかけ実践した。近代アメリカ型の民主社会実現を目標としたカリキュラムと位置づけられる。 |
| その他 | | | | |
| 1. 学会ゲストスピーカー | | | | |
| | | | | |
| 2. 学会発表 | | | | |
| 1. 占領軍政下における新教育実験学校設立過程について | 単 | 2017年07月30日 | 武庫川臨床教育学会第12回研究大会（武庫川女子大学） | 戦後、占領軍政下でカリキュラムの自主的開発に取り組んだ実験学校が設立する背景に、アメリカ軍のなかで交わされてきた日本の民主化政策についての議論や先行研究から、教育民主化に教員のカリキュラムの自主編成権を保障する点があったことを明らかにした。 |
| 2. 慢性の病いを抱えて生きる苦悩について考えたこと | 単 | 2016年07月31日 | 武庫川臨床教育学会第11回研究大会（武庫川女子大学） | 家族は多用な困難と苦悩を抱えるそれぞれの自己の集合である。客観的・生理的な自己の苦悩（客観的自己感）は、家族内の他者の有り様によって主観的・関係的な苦悩へと増幅または軽減され（主観的自己感）、それへの支援には臨床家の「対話場面」（クライマン）が不可欠であることを事例から検討した。 |
| 3. 東日本大震災後、宮城の教師たちはどのような教育実践の課題に取り組んできたか | 単 | 2015年09月26日 | 日本臨床教育学会第5回研究大会（北海道教育大学札幌校） | 日本臨床教育学会震災調査チームの一員として4年間の取り組みを概観し、学校教育史上初めての管理下で起こった震災として教師の果たした役割や、児童・生徒の感情を理解した援助的なカリキュラムの構想とその実践化に取り組む教師たちの事例を報告し、今後の研究課題を提起した。 |
| 4. 社会人大学院における援助職の「共育」の意味と課題 | 単 | 2014年9月27日 | 日本臨床教育学会第4回研究大会 | 臨床教育学の方法論の一つは、「自己理解」にあることにはすでに論議されてきたことだが、そうした「自己理解」のプロセスに同伴することが援助職の専門性の養成に不可欠であり、知識・能力や経験からの専門性の基底となることを、院生の研究過程をたどりながら明らかにする。 |
| 5. 占領軍政下における実験学校のコミュニティ・カリキュラム | 単 | 2012年9月30日 | 日本臨床教育学会第2回研究大会 | 戦後占領軍政下で、実験学校の組織化を行い民主主義教育への転換をはかる動きが西日本のいくつかの地域で推進された。その目的と初めての教師によるカリキュラム編成の過程を検討し、日本の教師による主体的な民主教育実践がみられたのかを問い直した。 |
| 6. 宮城県の教師・学校・地域の声から考えること | 単 | 2012年3月 | 日本教育学会「大震災と教育」特別課題研究グループシンポジウム | 震災体験の教師の語りから、日常における教師と子どもの教育的人間関係の構築、および個別的な危機の想定と民主的合意が、安全を生みだす創意と工夫に繋がり、それが子どもの絶対的安心感を生みだすことを指摘した。 |
| 7. 教師たちの震災体験の語りから、地域と学校のあり方を考える | 単 | 2011年10月 | 日本臨床教育学会第1回研究大会 | 震災調査から学校・地域の抱える課題を提起した。教師・子ども・地域の人々の知識・対話・感情の交流が、震災の中でもみられ、それは教育的状況であったと報告した。 |
| 8. 社会人大学院における「経験を語る」ことを中心においた授業の試み | 単 | 2008年10月 | 日本教師教育学会第18回研究大会 | 担当する「臨床教育実践学」を受講する社会人大学院生が、職場や地域の友人に対しておこなった支援・相談体験を記述し、その意義と課題について検討した。支援者としての立場にいながらも、自ら悩み事を切り出し、訴える側に「相談にのってもらおう」会話の語り口が、訴える側に安心感と信頼感をもたせ、相談効果があがることが検証された。 |
| 3. 総説 | | | | |
| | | | | |
| 4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| | | | | |
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 1. 滋賀県教育会雑誌目次一覧 | 単 | 2009年3月30日 | 武庫川女子大学教育研究所 | 全国に散逸する滋賀県教育会雑誌の目次一覧を作成。「滋賀県教育会雑誌復刻の意義と今後の研究展望 |

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
|---|---------|-------------|--|---|
| 5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| | | | | 」の標題で、研究課題を提起した。(151ページ) |
| 6. 研究費の取得状況 | | | | |
| 1. 災害トラウマの回復過程における子どものナラティブと応答的な生徒指導実践の検討 | 単 | 2020年2月29日 | 日本学術振興会科研究費基盤研究C【19K02798代表上田孝俊】「災害と学校・教育実践についての研究」No.4、162頁。 | 2019年度の北海道東部地震被災地調査および宮城・岩手の調査の記録を整理した。「長期的な課題と展望」をもって行われた実践や教師たちは、震災等の短期的な課題をその実践上に位置づけ、実践を交差させながら構築していることが確認された。 |
| 2. 現場の援助者たちと学び続けてきた大学院教育の一実践 | 単 | 2016年03月31日 | 【科研究費基盤B24330229代表田中孝彦】「教師の専門性の再検討と教師教育における『子ども理解のカリキュラム』の構想」研究成果報告集、pp.111-120 | 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科での社会人院生の研究過程とインタビューを踏まえ、援助職が自身の専門性をどのようにとらえ直そうとしているか、その基盤は何かを考察した。 |
| 3. 教育実践の基盤としての「子ども理解」 | 単 | 2016年03月31日 | 【科研究費基盤B24330229代表田中孝彦】「教師の専門性の再検討と教師教育における『子ども理解のカリキュラム』の構想」研究成果報告集、pp.41-60 | 北海道・上ノ国町の教師・上野秀勝・笹原克哉、滋賀・近江八幡の教師・早久間学の実践及び聴きとりをもとに、教師の「子ども理解」の基盤に、「聴く」「見る」ことの意味性、教師の自己理解、子どもの「人格」を尊重と敬愛、教育実践の地域との共同があることを述べた。 |
| 4. 地域の変容と教育実践の模索—石巻市雄勝町の小学校実践から— | 単 | 2015年03月28日 | 【平成24-26年度科研究費基盤(A)24243973「東日本大震災と教育に関する総合的研究 研究成果報告書(全体編その2)」(代表：藤田英典、日本教育学会モノグラフ・シリーズ)、13p。 | 東日本大震災被災地では、居住の制限・就業場の喪失に伴い、学校統合や廃校が進んでいる。地域を基盤とした教育実践が、被災後行われていない現状の問題点と課題を、地域調査を基盤に考察した。子どもの被災前の生活空間を迎える活動が、被災の心象だけでなく、自己の存在感を再構築することに繋がっていた。 |
| 5. 惨事にあった子どもたちにとっての教師の役割 | 単 | 2014年3月28日 | 平成24-26年度科研究費基盤(A)24243973「東日本大震災と教育に関する総合的研究 研究成果報告書(全体編その1)」(代表：藤田英典、日本教育学会モノグラフ・シリーズNo.5) p.51-61 | 子どもが心身に大きなダメージを受けたとき(震災・津波からいじめ・暴力まで)、その感情を理解しうる“誰か”の存在が決定的に重要であること、そしてそのことが、将来リマインダーによる惨事の感情の賦活場面に出会っても、乗り越えることができる基盤になることを考えた。 |
| 6. 東日本大震災の現地調査～教師からの震災体験の聴き取り～ | 単 | 2012年3月 | 科研究費共同研究(基礎研究A)(課題番号21243043、代表：田中孝彦)「臨床教育学の構築と教師の専門性の再検討」『臨床教育学と教師の専門性 研究資料集Ⅲ』pp.27-33 | 2011年度における仙台市、山元町、亘理町、石巻市の教師や子どもたちからの聴き取り調査の方法と結果について報告した。教師と子どもとの日常的な教育的人間関係の構築が、危機場面での安心感に繋がりと、その結果、リマインダーの抑制、回復過程でのトラウマの低減、ひいては子どもの希望に導くであろうことを、短期の調査ではあるが想定できた。 |
| 7. 武庫川女子大学大学院調査の中間総括 | 単 | 2011年3月 | 科研究費共同研究(基礎研究A)(課題番号21243043、代表：田中孝彦)「臨床教育学の構築と教師の専門性の再検討」『臨床教育学と教師の専門性 研究資料集Ⅱ』pp.194-199 | 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科における臨床教育学の構想とその教育課程を整理し、修了生からの聴き取りをもとに、現職教員の臨床的課題(生徒指導)を研究するためのリカレント教育のあり方として、エスノメソドロジカルあるいはナラティブな探究手法が有効であることを確認した。 |

学会及び社会における活動等

| 年月日 | 事項 |
|---------------------------|-----------------------|
| 1. 2015年1月～現在 | 日本臨床教育学会『臨床教育学研究』編集委員 |
| 2. 2014年9月29日2016年8月31日 | 日本臨床教育学会理事 |
| 3. 2011年3月19日から2014年9月28日 | 日本臨床教育学会 事務局長 |
| 4. 2010年5月から2011年3月 | 芦屋市社会教育委員 |
| 5. 2009年6月から2013年3月 | 西宮市青少年問題協議会 委員(副会長) |
| 6. 2008年8月～現在 | 武庫川臨床教育学会理事 |
| 7. 2008年7月～現在 | 兵庫県教員10年目研修講師 |